

研究推進校事業報告書

<取組と成果のポイント>

①「考え、議論する道徳」の授業づくり

道徳科の授業の中で、段階的な思考を毎回促し、対話を通して互いの意見を交流させながら、考えを問い直すことにより、そのことよさに生徒は気づき、周りの目を気にせずに自己の感じたことや考えをありのままに表現できるようになった。自分の意見と他者の意見を比較・取捨選択・統合して新たな考えを構築することができるようになった。

②ユニット（小単元）開発

道徳科の授業と関連する学習や活動を関連づけまとまりとして捉えた学びを計画することで、学んだことを一般化したり、焦点化したり、汎用的に捉えたりしながら、自分がどんなことを考えているかを深く知ることができるようになっていった。相手の立場に立って考えるようになり、様々な場面や活動において相手意識をもった行動を意識できるようになった。

1 研究推進校の概要

学校名	所在地	電話番号	生徒数	備考
知多市立旭南中学校	知多市金沢字中向山 132 番地	0569-43-4121	416 人	

2 研究課題（テーマ）

「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の充実

—「考え、議論する道徳」の実現—

3 研究主題とその設定理由

(1) 研究主題

本校では、本事業の研究テーマを受け、本校生徒の実態を踏まえ、次の主題を設定した。

自ら考え判断し、行動につなげることができる生徒の育成

—自分を語り、仲間を受け止め、考えを深め合う道徳授業を通して—

(2) 主題設定の理由

本校は、市内5中学校の中でも比較的落ち着いた生活できる生徒が多く、与えられた課題にしっかり取り組むことのできる生徒も多い。また、秋に行われる体育祭では、3年生がリードして応援合戦の縦割り活動を成し遂げるなど一致団結した姿が見られる。しかし、市内5中学校で行ったアンケートでは、他校に比べ自己肯定感が低いという結果が見られた。一見すると充実した中学校生活を送っているように見える本校の生徒たちであるが、個に焦点を当ててみると次のような課題があることを教員間で共有した。

① 同調意識が強く、よく考えないまま周りに合わせて無難に行動しており、自己表現を好まない。

② 自分の行動が周りに及ぼす影響を考えられず、相手意識が乏しい行動をしがちである。

研究課題（テーマ）に掲げられている「考え、議論する道徳」を実現するためには、生徒一人一人が自分の考えをもち、その考えをまず語り、仲間の考えを受け止めながら共感したり、相違点に気付いたりしながら、自分自身と相手との関係性を深め、よい生き方を模索していくことが大切であると考えた。

そこで本校生徒の実態から主題を設定し、どの生徒も自分への自信を高め、ともに学校生活を楽しむことができるようにするために、道徳科の授業を要として、全教育活動の中で道徳教育を推進していくことにした。

4 研究の概要及び特色

(1) 目指す生徒像 自ら考え判断し、行動につなげることができる生徒

「自ら考え判断し」…自分や相手、自分が所属する集団にとって価値あることを考え、判断することができる生徒

「行動につなげる」…自分のよさや持ち味を自覚し、相手意識をもった行動を通して、より自分を高めていこうとする生徒

(2) 研究の仮説

(仮説Ⅰ) 道徳科の授業の中で、段階的に思考することや、課題追究のための対話を繰り返し行うことで、自分の考えを述べたり、人の意見を聞いたりすることのよさを実感しながら、考えを深め合い判断する力を高めることができるであろう。

(仮説Ⅱ) 道徳科の授業を要として、関連する学習や活動をまとまりとして計画することで、道徳科の授業で知った自分のよさや持ち味を生かし、相手意識をもちながら学習や活動に取り組むことができるようになるであろう。

(3) 研究組織

現職教育主任と道徳教育推進教師を中心に教員を、以下の三つの部会に分け研究を進める。3部会で行っていることの共有・調整・協議は、各部の部長と学習指導部長、教務主任で構成された、毎週水曜日に位置付けた研究推進委員会で行う。

A部会	カリキュラム部会	道徳科の授業と他の学習・活動をまとまりで捉えたユニットの作成
B部会	授業研究部会	「考え、議論する道徳」実現のための授業を構築
C部会	評価部会	生徒、教員、授業、カリキュラムの評価

(4) 研究の手だて

ア ユニット（小単元）開発（A部会）＜仮説Ⅱについての手だて＞

道徳科の授業で学んだことを学校や各学年の行事、総合的な学習の時間、教科学習等で生徒に意識させることで、判断し行動する力につなげたい。そこで、道徳科の授業との関連を考え、数時間のユニット（小単元）を構想し、年間の授業計画を作成・実践し、その有効性を検証する。

イ 「考え、議論する道徳」の授業づくり（B部会）＜仮説Ⅰについての手だて＞

(ア) 道徳科の授業の旭南スタイルを確立

	手だて	生徒の思考の流れ
①	「今日考えること」（追究する価値）の提示	課題の意識化と学びに向かう姿勢をつくる
②	教材を範読後、直ちに中心発問を投げかける	課題への初発の考えをもち、自己を自覚する
③	初発の意見の表明を促す	仲間の考えに触れ、同意点、相違点に気付く
④	切り返し、揺さぶりの補助発問を投げかける	対話を通して自分自身の考えを問い直す
⑤	再び、中心発問を投げかける （あるいは、テーマ発問を投げかける）	これまでの意見を取捨選択したり統合したりして再構築した自分の考えに出会う
⑥	生徒の言葉を引用しながらまとめる	対話を通して考えたことへの評価を受けることで、自己や仲間への信頼感を高める

(イ) 中心発問の作成

生徒が「考えてみよう」と思えるような対立する場面をジレンマ的に扱い、「あなたならどうしますか」と自我関与が促されることをねらいとした発問を作成する。

(ロ) 研究授業の推進とフィードバック

「考え、議論する」授業の構築には、教員自身がこの力を体得する必要がある。そこで、次のような点を大切に研究授業を実施する。

- ① 学年代表者による研究授業を各学年で実施する。
- ② 全教員が参観する授業は、全教員で協議（計画）し、模擬授業を行った上で実施する。
- ③ 担任は年間2回道徳科の授業を公開する。各学年で協議し、模擬授業を行った上で公開する。
- ④ 研究授業後は、全教員で課題を共有し、次の研究授業の＜チャレンジ項目＞とする。

ウ 評価の工夫（C部会）＜仮説Ⅰ・Ⅱ検証のための手だて＞

(ア) 生徒のワークシートへのフィードバック方法

以下の①～③の三つの評価の観点において、毎回の授業で生徒が記入したワークシートに、観点に合わせて赤で線（①は下線、②は波線、③は四角囲い）を入れ簡易的に評価する。

- ① 自己を見つめることができたか。（メタ認知、セルフモニタリング）
- ② 物事を多面的（学習対象がさまざまな面をもっていること）・多角的（学習対象をさまざまな角度から考察し、理解すること）に考えることができたか。
- ③ 自己の生き方についての考えを深めることができたか。

(イ) 道徳科の評価文の検討

①～③の観点で成長が見られた点や、特筆すべき事項を見取り、道徳科の評価文を作成する。

(ウ) 自分の成長を振り返る時間の設定

学期ごとに振り返りの機会をもつことで、今の自分を受け止めつつ、次の目標をもつという姿勢をつくる。

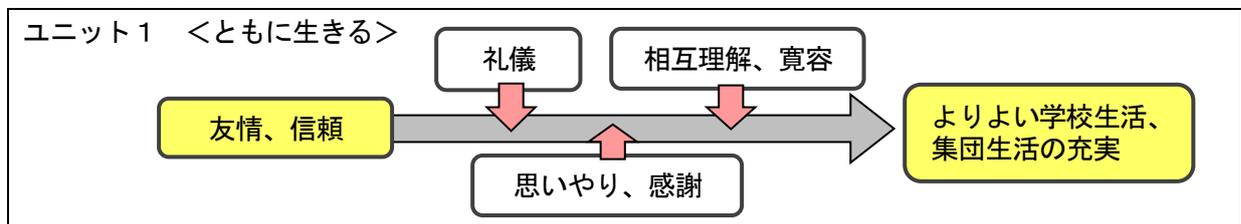
(5) 研究課題に関わる取組

ア カリキュラム部会（A部会）の取組

(ア) ユニット（小単元）の作成

ユニットのテーマは、本校の総合的な学習の時間のねらいと関連付け、「ともに生きる」と「自分らしく生きる」とし、教育活動全体と道徳科の授業の関連を図るよう計画した。（図1）

まず、ユニットの最初と最後に学習テーマに対する考えを書くことで、生徒自身が学びによる自己の心の変化や考えの変化を自覚的に捉えられるようにする。これは、長期間の学習であってもねらいとするテーマを失うことなく、自分の成長を振り返ることにつながられるようにするためである。また、教員自身も生徒の成長を知ることができるとともに、自分の授業に対する振り返りができ、授業改善に役立てることができると考えた。



【図1：1年生のユニット例】

ユニット作成において、学校祭の場を、全校生徒が縦割り活動によって絆を深める体育祭、学級の絆を深める文化祭・合唱コンクールと捉えるとともに、防災学習を、自助共助の学びを通して、様々な人とよりよい人間関係を築く機会として、ユニットの中に位置付けた。（資料1）

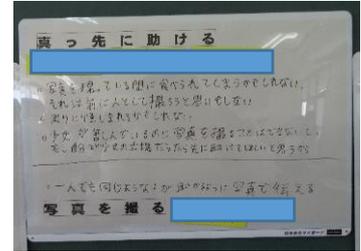
テーマ	時数	主題及び関連する活動	内容項目
ともに生きる (互いのよさを知り、関わり合おう)	1	心と形	B-(7) 礼儀
	2	思いやりの心	B-(6) 思いやり、感謝
	3	避難所宿泊訓練	B-(9) 相互理解、寛容
	4	いじめの芽を摘む	B-(9) 相互理解、寛容
	5	思いやりの尊さ	B-(6) 思いやり、感謝
	6	高め合う友情	B-(8) 友情、信頼
	7	体育祭	C-(15) よりよい学校生活、集団生活の充実
	8	学校に誇りをもつ	C-(15) よりよい学校生活、集団生活の充実
	9	文化祭・合唱コンクール	B-(8) 友情、信頼

【資料1：1年生のユニットの内容】

イ 授業研究部会（B部会）の取組

年度当初に全教員で確認した授業（旭南スタイル）をもとにして、研究計画の通り、各学年代表者による研究授業（6月、9月、10月）と、全担任による一斉授業公開（11月15日）に向けて実践を進めた。6月、9月、10月に行われた研究授業の成果と課題、11月15日に行われた公開授業で全教員が意識したポイントを時系列で示す。

(ア) 6月20日（木）3年D組「ハゲワシと少女」



<チャレンジ項目>

- ・年度当初に確認したスタイルでの授業実践を行う。

<成果>

- ・危機迫るジレンマ的な中心発問を準備したことで、個々の生徒がよく考えており、仲間の考えも聞きたいという雰囲気が生まれた。また、個々のワークシートにもそのことがうかがえた。
- ・どんな意見に対しても教員が肯定的に受け止めることを繰り返し行ってきたことで、思っていることを安心して口にできる雰囲気が学級にでき始めていた。

<課題>

- ・「今日考えること」（追究する価値）と中心発問との関連性をしっかりと考えたい。
- ・「意見の伝え合い」のレベルから、生徒間で考えを深め合うための指導の工夫が必要である。
- ・生徒の言いたいことを教員が解釈して進めていくのではなく、生徒の意見でつなぐ授業にしていくために、教員は、ファシリテーター的な役割を果たすようにする。
- ・協議会での意見は、生徒の学びの姿を根拠として協議するようにする。

(イ) 9月12日（木）2年B組「たすきとポンポン」



<チャレンジ項目>

- ・生徒の本音が出にくくなる恐れがあることと、生徒と教材との出会いをスムーズに行えるようにするために、授業の導入段階で「今日考えること」（追究する価値）を提示しない。
- ・教具として心情円盤を使用し、生徒の考えの度合いを可視化し、葛藤する心を伝え合えるようにする。
- ・協議会では、生徒の発言や記入したワークシートの内容など（生徒の学びの姿）を基に、よかった点や改善点を話し合う。

<成果>

- ・「今日考えること」を提示しないことで、中心発問について話し合う時間を十分確保することができ、個々の生徒のもっている感性がそのまま表出し、多様な意見を発表させることができた。

- ・教具として心情円盤を使用したことで、心の状況を互いに見合いながら、中心発問に対する葛藤(どちらにも決めきれずにもやもやした部分)を話し合うことができた。
- ・協議会では、生徒の発言やつぶやき、記述そのものを基にして効果的な補助発問を考え直したり、よかった点や改善点について具体的に話し合ったりすることができた。

<課題>

- ・「今日考えること」を提示せずに授業に入ったことで、一つの教材から価値の広がりが見られたが、どこに焦点を当ててより深めていくのかがやや曖昧になってしまった。
- ・どのような考えが出てくるかさらに予想するとともに、指導者がどの部分を深めていくかのビジョンをしっかりとつ必要がある。
- ・少人数での話し合いが、まだ「意見の伝え合い」レベルであった。生徒が、互いの意見の類似点や相違点に着目して話し合えるようにしていく必要がある。

(ウ) 10月25日(金) 1年B組「父の言葉」

<チャレンジ項目>

- ・「今日考えること」の提示は行わない代わりに、教材についての関心を高めるための方向付けとしてエピソードトークを簡単に行い、それを導入とする。
- ・生徒の発言の多様性を重視するが、生徒の言葉をもとにキーワード等で大まかに価値付ける。そして、一番追究したいことについて深く掘り下げるようにする。
- ・板書では、「気持ちメーター」を使い、生徒の心の揺れを可視化する。

<成果>

- ・エピソードトークで、スムーズに教材の世界に入ることができた。
- ・気持ちメーターを使用した板書を使用し、学級全員の気持ちを可視化したことで、学級の実態に即した切り返しや掘り起こしの発問を生徒に投げかけながら考えを伝え合うことができた。
- ・ワークシートと心情円盤を操作したことで、個々の生徒の心の揺れを捉えて、学級全体に広めることができた。
- ・生徒が、他者の意見と自分の意見を比較したり、統合したりして考えを深めることができるようになってきた。
- ・担任との信頼感、仲間の受容によって、安心して意見を出せる関係が、学級内に醸成されてきた。

<課題>

- ① 教員が生徒の意見の発信を引き受け過ぎてるので、教員はファシリテーターとしての認識を強くもち、議論を促進させる役割を担う。
- ② 生徒が「話し合いたい」と思える場面で話し合いの場を設けるようにする。
- ③ 板書については、生徒の考えを整理したり、思考を助けたりできるような板書計画を再考する。また、生徒の発言をセンテンスでなくキーワードで板書するようにして、生徒が、そのワードをメモ欄に残し活用(思考)できるようにする。

(エ) 11月15日(金) 全担任による授業公開

10月25日(金)の授業研究で課題となった①～③を、全担任が本時のチャレンジ項目として、授業実践を行った。

ウ 評価部会(C部会)の取組

(7) 生徒の振り返り

生徒の心の成長や考えの変容を見取り、評価をするにあたって、毎時間のワークシートの記述のみでは不十分であると考えた。また、生徒自身にとっても、1学期の内容や考えたことをもう一度

振り返ることが、自己の心を見つめるために必要だと考え、学期末の道徳科の時間を利用して、「1学期の道徳の授業を振り返って」のワークシートを用いた振り返りの時間を設定した。生徒に質問した内容は、以下の3点である。

- ① 道徳科の授業の中で、自分が心がけたこと
- ② 道徳科の授業を通して、以前の自分と比べて成長した点や自分に新しく身に付いた力
- ③ おもしろくなかった、または、よく分からなかった授業や場面とその理由

①では、自分の意見を素直にもてるようになった、自分の考えを相手に話せるようになった、②では、新しい意見を受け入れてもう一度自分で考えられるようになったなど、自分の変容を自覚することが書かれていた。また、③のおもしろくなかった場面やよく分からなかった場面については、教材が筆者の考えの押し付けと捉えられたり、教科書に答えになることが書いてあったりして自分の考えが制限されると感じていることが分かった。(資料2)

- ① 道徳科の授業の中で、自分が心がけたこと
 - ・周りの人にでも、紙でも、発表でもなるべく本音を出しました。そして、他の人の意見によって考え直すこともしました。
 - ・物語の主人公になりきって、「この場面では、自分はこう思うな」など、想像しながら読んでいました。また、自分が思ったことは積極的に発言しました。
- ② 道徳科の授業を通して、以前の自分と比べて成長した点や自分に新しく身に付いた力
 - ・自分の意見を話したり、人が話しているのを聞いたりして、新たな考え方を見つけ出せるようになりました。それに伴って他の授業でも手を挙げられるようになりました。
- ③ おもしろくなかった、または、よく分からなかった授業や場面とその理由
 - ・5月22日 教材名：どうせ無理をなくしたい
 - 教科書に答えが書いてあり、自分なりに考えるのが難しく思いました。自分と関連させるのが難しく言葉にできなかつたと思いました。

【資料2：生徒の「1学期の道徳授業を振り返って」のワークシートより】

(イ) 教員による評価文の作成

現職教育では、外部講師にも助言をいただきながら、以下のように、評価文作成の指針(資料3)をもつことができた。生徒自らの振り返りをもとに、実際に評価文を作成し(資料4)、学年で検討し、疑問点や課題を全体で共有した。「生徒の具体的な意見を取り上げるのと、抽象的な表現にするのではどちらがよいのか」「抽象的で一般論として言える内容は、生徒それぞれの思いを反映できないのではないか」などの疑問点が挙がった。その後、助言により適切な評価文にすることができた。



- ・メタ認知、多面的・多角的思考、生き方の三つの評価観点のどれかに絞って書く。
- ・評価文の前半に、その生徒の考えの傾向や授業の様子を記述し、後半は、「特に」という言葉を使って、具体的な授業の場面や生徒の考えた内容を書く。二つ以上の観点で記述する場合は、「また」という言葉でつなぐ。
- ・前半の内容については、パターン化してくるので、文例を作って活用する。
- ・教員側の捉えにならないためにも、生徒の記述を「 」を使って引用することも可能とする。
- ・生徒の振り返りだけを頼りにするのではなく、文章が苦手な生徒の場合、授業での発言も活用する。
- ・通知表と指導要録で内容を変えないようにする。ただし、要録は内容項目名で、通知表は教材名で記入する。

【資料3：評価文作成の指針】

常に教材の中で起こることを自分の立場に置き換えて考えることができました。特に、差別について考える学習では、自分のつらい経験を踏まえながら、考えを深めることができました。

様々な立場に立って考えたり、他の生徒の意見を受け入れたりすることにより、自分では気付いていなかった自分に気付けるようになりました。特に、差別についての授業では、自分が無意識に差別をしていることに気付くことができました。

級友の様々な意見を聞くことにより、自分になかった考えを生み出したり、いろいろな立場に立って考えることによって選択肢を増やしたりすることができました。特に、臓器提供について考える授業では、初めは、人の死を心臓が止まるときと捉え、脳死の状態では臓器提供を認めないという意見をもっていました。事故にあった本人の立場で考えようとする仲間の意見を聞く中で、「本人の意思があれば提供してもよいのではないか」「家族や自分がこのような状況になるかもしれないから、しっかり家族と話し合っておくべきだと思う」などと、初めの自分の意見を再考し、考えを深める様子が見られました。

【資料4：現職教育研修会で作成した評価文 3年生の例】

(6) 分析・考察

評価部会が作成し、実施したユニット学習の振り返り、自己の学びの振り返り、教員の授業の振り返りや各授業の振り返りをもとに仮説の検証を行う。

ア 研究授業・日常的な授業実践（B部会）＜仮説Ⅰの検証＞

次の資料5は、仮説Ⅰの中に記されている目指す生徒の姿を4つの項目（①自分の考えを述べること
のよさを実感することについて、②人の意見を聞くこと
のよさを実感することについて、③考えを深め
合うことについて、④判断する力を高めること
について）に分類し、生徒の記述をまとめたものである。

①自分の考えを述べること のよさを実感することについて

- ・以前より、自分の意見が「ぱっ」と思いつくようになった。
- ・よい人にはなろうとせずに、自分の思ったことを正直に発表するようになった。
- ・自分の意見を尊重して、友達の意見を聞いて納得するまでは友達に流されないようにした。
- ・自分の意見を考えるときに論理的に考え、筋道立てて考えることができるようになった。
- ・自分のことをよく考えるようになった。自分の意見に対して、本当にそうなのか、そうするだろうか、と自分を見つめるようになって、そこから新しい意見がうまれていくようになった。
- ・相手の意見に対して「賛成」「反対」の立場を意識して発言するようになった。
- ・常識にとらわれたり、多数派の意見に流されたりすることが少なくなった。

②人の意見を聞くこと のよさを実感することについて

- ・相手と考えが違い、なぜそう思ったのか疑問に思ったときも、みんなが理由を言ってくれるから納得できて考えが広がった。
- ・自分とは反対の意見をよく聞くようにした。多方面からの考え方を知ることができるし、物事の解決にも多方面の考えを取り入れられるから。
- ・ちゃんと話を聞き、真っ向から否定しないようにした。
- ・相手の意見を表面上のものだけでなく、その裏も考え、判断する。
- ・以前は話しているのをただ聞いているだけだったが、今は意見に対して質問できるようになった。
- ・自分の出した答えの根拠や考えが自分でもよく理解できないときもあって、友達と一緒に考えることで、自分をよく知ることができた。
- ・いろいろな意見が出る中で、「どの考え方が自分に似ているか」「この意見はどうだろうか」と思うことが楽しく感じる。
- ・学級の全員が同じ事について話し合いをしていたり、ふだんあまり発言をしない人も発言していたりして、学級がよい空気になっているのではないかと感じた。

③考えを深め合うことについて

- ・付け足しや反論をするのは難しいけど、僕の言った意見を誰かが利用して意見を述べてくれるとうれしい。
- ・友だちの考えを聞き、自分の考えに付け足し、いいと思った意見をメモするようになった。
- ・他人の意見を反映させて、自分の判断材料に加えていく。
- ・相手の意見を聞いて納得するのではなく、それは自分の考えに比べてどうなのか、それはどんなときでも言えるのかなど考えをめぐらすことが身に付いた。
- ・自分の意見と他人の意見を比べ、その差はなぜ生まれたのか、その人は何を考えて答えにたどりついたのか、人と自分にはどのような思考の違いがあるだろうか、などということの一つ一つ深く考えた。
- ・常に一つ一つの行動に疑問をもつようになった。

④判断する力を高めることについて

- ・ふだん生活している中でありえそうな場面で考えることができた。

【資料5：1・2学期の道徳の授業の振り返りシートの記述まとめ】

道徳科の授業において、段階的な思考を促したり、生徒が「考えてみたい」と思えるような中心発問を与えたり、また、教師が積極的に生徒の意見を受容したりすることで、①の記述に見られるように、自分を飾ることなく本音で話をしようという生徒や、自分がどんなことを考えているのかを見つめるようになった生徒が増えてきたように感じる。周りに同調するのではなく、自分の考えに自信をもって発言する生徒が増えてきたのではないかと考えられる。これらのことは、アンケート結果にも表れている。年度初めと12月に行ったアンケートでは、「道徳科では、自分の意見を友だちに伝えている」という項目について「そう思う」と答えた生徒が22%から33%になった。また、「自分にはよいところがあると思う」という項目では、「そう思う」と答えた生徒が24%から33%に増加しており、自己表現ができる生徒が増えてきたと言える。

授業の中で対話を積極的に取り入れたり、切り返しや揺さぶりの発問を投げかけたりすることで、②や③の記述に見られるように、友だちと対話することで自分への理解が深まったり、自分の意見と友だちの意見を比較してよりよい考えを模索するよさを感じたりする生徒が増えてきた。

一方で、④判断する力を高めることについては、思い描いた姿に到達する生徒がほとんどいなかった。本校では、道徳科の授業で具体的な事例をもとに考えた価値について、自分の身近な生活の場面に当てはめて考えられるかどうかを「判断する力」としている。授業では、価値の自覚の場面において再び中心発問を問うことにしている。そのため、その授業で扱った内容に関する考え方の変容は見取ることができるが、その考えを自分の実生活に当てはめて考えさせるような問いかけになっていないため、「判断する力」を向上させることはできなかった。ただ、本校の実態として、まずは周りの目を気にせず本音で自分の考えを述べられるようにすることを優先してきたため、このような結果になってしまったのではないかと考える。今後は、価値の自覚の場面で「判断する力」を向上させられるような問いかけの工夫をしていきたい。

イ ユニット学習（A部会）〈仮説Ⅱの検証〉

学級や縦割りで編成された活動場面や実行委員会の活動において、「ともに生きる」活動のねらいに迫った姿が顕著に感じられたのは、生徒間の関わり方の変化からである。自分から声を掛ける、考えたことは伝えるなど、人と関わっていくことへの抵抗感が減り、先輩後輩間の関わりもごく自然であった。また、会の運営・進行を担当した実行委員は、準備した原稿に各自で言葉を補いながら、相手意識のある話し方をする姿があった。さらに、1学年の避難所宿泊体験学習では、要配慮者への支援から、全ての人が快適に過ごせるような避難所であるようにという目標を生徒らが設定し、体験学習を行うことができた。これらのことは、当事者として考え、行動しようとする姿であると捉えた。

コミュニケーション能力をもつことで
相手のことの方を先におぼれ、
共に生きることで相手の性格
や、長所を知る事ができ、そ
して、協力し、相手のことを考え
行動し、協力することかできる
ようになる。

協力しあい、一人一人のことをわかり合え
ること。意見を出し合い、その人の気持ち
を知ること。注意しあいい所はほめあ
いられること。共に生きる＝支え合い。支え合いは
自分がだめなときは仲間が助け、仲間がだ
めなら自分が助ける。そのくり返し、信
頼

【資料6：1年生徒Aが4月（左）と11月（右）に記入したワークシート】

自分の弱さを素直に受け
入れることが大切。また、そ
の弱さなどを人にさらけ出せ
る強さを持って生きて、
自分が納得できる生き方
をする。

自分の弱さを認め、その弱さを
次の自分に生かせるようにする
こと。それを続けることで、自
分の弱さを強さも武器に
できると思っている。

【資料7：2年生徒Bが10月（左）と12月（右）に記入したワークシート】

学習前の自分は、「人に流されたりせず自分の意見をつらぬき通す」と書い
ていました。今思うととても自分勝手な考え方をしていたんだなと反省を
しています。道徳の授業を通して私は、周りの意見を聞きそれに「流され
る」のではなく自分の「考えを深める」という思考をすることができま
うようになったのだと思います。

【資料8：2年生徒Cが「自分らしく生きる」のユニット学習後に記入したワークシート】

ユニット学習での振り返りシートに書いた生徒の感想からもそのことが伺える。4月の段階では、「とも
に生きる」について、「互いのよさを知る」「思いやりの心をもつ」という考え方をしていた。それが
11月には、「互いに支え合いながら生きていく」「助け合いながら生きていく」「互いに信頼し合う」とい
う考えに変わっていた。最初は、相手のよい所を知り、自分に生かしていくという自分の側から捉えて
いたが、ユニット学習を通じ、相手の側に立ち「ともに生きる」ということを捉えられるようになって
きたと感じた。

資料6は、1年生徒Aの、「ともに生きる」とはどういう意味かという問いに対する、4月と11月のワ
ークシートである。この生徒は4月、11月ともに「協力し合う」ということを書いている。しかし、4
月と11月で、同じ「協力し合う」でも、考え方が全く変わっている。4月の段階では、相手の性格や長
所を知るという自分中心のことしか考えていなかった。それが11月の段階では、「ともに生きる」を支え
合いと捉え、「自分がだめなときは仲間が助け、仲間がだめなら自分が助ける」と書いている。「とも
に生きる」の中に、「自分自身を含めたみんな」という考え方と、他者の気持ちを知り、支え、助けるとい
う考えができるようになった。

後期は「自分らしく生きる」というユニットで、授業実践を行った。本校2年生は職場体験学習を11

月に実施している。「ありのままの自分」と「勤労」を結びつけて職場体験学習を行うことが、将来の進路選択に役立つと考えたからである。「自分らしく生きる」の実践でも、生徒の考えに深まりや変容が感じられた。

資料7は2年生徒Bの「自分らしく生きる」とはどういう意味かという問いに対する、10月と12月のワークシートである。この生徒は10月の段階では、自分の弱さを受け入れることが大事と書いているが、12月の時点では、自分の弱さも強さも武器にできると書いている。弱さを受け入れる強さや、克服しようと努力するがんばりこそが自分らしく生きる強さに繋がり、自分自身の武器になると、自分自身の考えを深めることができた。

また、資料8は別の2年生徒Cの学習前と学習後の思ったこと、感じたことの記述である。この生徒は10月の段階では、人に流されたりせず自分の意見をつらぬき通すことが「自分らしく生きる」ことだと考えていたが、12月の時点では、相手の個性を尊重することが「自分らしく生きる」ことだと考えている。10月の時点の自分の考え方を、「自分はなんて自分勝手な考え方をしているのか」と反省し、「大事なものは流されないのではなく、相手の個性を尊重し、自分の考えを深めること」と、自分自身の考え方を大きく変容させている。

このように関連する学習や活動をまとめりとして計画し、実施することは、自分のよさや持ち味を生かし、相手意識もちながら学習や活動に取り組むのに適していたと考える。

5 研究の評価

(1) 研究の成果

- ・道徳科の授業の中で、生徒に段階的な思考を促し、対話を通して互いの意見を交流させ、自分自身の考えを問い直すことにより、周りの目を気にせずに自分の意見をありのままに表現できるようになったり、自分の意見と友だちの意見を比較・取捨選択・統合したりして、自分の考えを深めるよさに気付くことができるようになったりした。
- ・道徳科の授業と関連する学習や活動をまとめりとして計画することで、自分がどんなことを考えているかを深く知り、また相手の立場に立って考えるようになり、相手意識をもった行動につなげることができるようになった。

(2) 今後の課題と取組

- ・授業で学習した内容を実際の生活に当てはめて考えて自分自身をモニタリングする価値の一般化が十分にできていない。そのため、今後の実践では、価値の自覚の場面で、「今日学習した内容について、自分の生活であてはまることはありますか。」という問いかけを行い、「自分の中では今のところ見つからない」ということを認識することや、体験している友だちの話聞き疑似体験させていくことで、道徳の授業と現実の場面とをつなげていきたいと考える。

6 おわりに

年度当初、本研究を始めるにあたり、生徒にしかるべき姿を求める以上、教員集団がそうならなければ生徒の姿を変えることはできないということを共通理解した。教員間のスローガンを、「自ら考え判断し、行動につなげることができる教師」とし、教員間の対話を通して一つずつ授業を創り上げてきた。毎週の学年会で道徳科の授業の検討をすることが日常化し、授業が終われば「こんな発言があって、こう切り返したよ」などという意見交換も頻繁に行われてきた。「発言が出なければ、教員の発問がよくない」「議論がうまく進まなければ、教員の切り返しや揺さぶりの補助発問がよくない」といったように、生徒の学びの姿から自らの授業を振り返り、道徳科の授業に全教員が真摯に向き合ってきた。その結果、教員の道徳科の授業への意識や授業力が向上し、生徒の姿も少しずつ変化が見られた。この研究が学校全体の活力アップに貢献したことは言うまでもない。